

シェアード・ディシジョン・メイキング

医師と患者の言葉のやり取りは日常の診療では重要な医療行為の1つとなる。患者の訴えをよく聞いたうえで、問題点を解決するために必要な検査と治療が行われる。そこでは言葉の使い方がたいへん重要になるが、病気の症状や検査、治療の内容について医療者から発せられた言葉が患者側にどこまで理解されているかについては、いささか不安になることがある。患者の理解程度はさまざまであり、重要な内容については完全に伝わっているかどうかを確認しながら診療を進めないと、のちに行き違いが生じる可能性がある。些細な言葉使いがもとで、その後の医療行為に支障をきたすこともおこりうる。

検査項目の内容、その後の治療法の決定をする際には、医師がエビデンスに基づいて病気の内容や治療法などを説明し、患者の同意を得るというインフォームドコンセントを行うことが推奨されている。命にかかわることのない多くの疾患では、十分な説明を行いつつ主治医の判断で検査を行い、治療方針が決められていることにとくに問題は生じてこない。しかし患者の意向が反映されないまま医療行為が進んでしまうと、予想外のことがおこった場合に、トラブルの原因につながることもある。

悪性腫瘍など治療の選択肢が複数ある場合、原因不明な疾患のように治療が不確実になる場合などでは、医療者や患者・家族に後悔しない医療選択が求められる。ことに生命の予後にかかわる疾患では、患者の生き方に配慮し、意思を尊重しなければならない。また、医療費が高額になる折には、患者の社会的、経済的背景を考えることも必要になる。患者が病気に対してどのような考え方をもっているのか、また、どのようなことを求めているのかを十分に聞き取ることが治療を行ううえで大切なことになる。

医療者から一方的に行う医療では、先に触れたように病気に対しての患者の理解度は程度がさまざまであり、説明に対しどこまで理解されたのかの判断がむずかしいことがある。近年では医療者が一方的に行う医療行為ではなく、医師が患者の希望を調整しながら治療法などを考えてゆくという考え方であるshared decision-making in medicine (SDM) が実践されてきており、共有意思決定、協働意思決定などと訳されているが、日本語での表現はまだ統一されていない用語であり、患者と医師の両者が医学的な意思決定プロセスに貢献する医療を指す。これらは治療のむずかしい疾患、長期に及ぶ慢性疾患、予後不良な疾患などに対応する場合には必要なことで、その内容を知っておくことは重要である。

医療者が患者の思いを引き出しながら治療を進めてゆけば、言葉上の行き違いなどは避けることができ、些細なトラブルは減ってゆくことになる。さまざまな環境にあり、いろいろな考え方、生き方をもった患者に対しては十分な話し合いのもと、心をもってことを進めるのが大切である。